

第五編
近
世

第一章 黒田氏の豊前支配

第一節 豊臣秀吉の九州下向

一 検使黒田孝高

天正十三年（一五八五）八月、四国の長宗我部元親を屈服させた豊臣秀吉は、同年十月、九州惣無事令を発して、毛利・大友・島津等へ、戦闘を止め、和議を結び、上洛するよう命じた。これに応えて、天正十四年（一五八六）二月、大友・毛利の和議が成り、瀬戸内海の安全が保障された三月、大友宗麟は病を押して、はじめて上洛した。太閤殿下秀吉に謁見し、和議に応じない島津義久成敗の確約を取り付けて帰国した。大友宗麟がまだ帰着していない四月十日には、早くも、黒田孝高よしかを検使に指名し、毛利輝元・小早川隆景・吉川元春らに人質を出させ、豊前・肥前の国人から人質を取ること、門司・麻生・宗像・山鹿の城々へ、兵員・兵糧を差し込めることを命じた。同年六月、島津義久は北上を開始し、肥後八代に着陣した。先鋒軍は筑後高良山に陣を進めて、七月には筑前に侵入し、五ヶ山城・高鳥居城を攻略して、岩屋城・宝満岳城の攻略にか

かった。

七月二十七日、岩屋城は城主高橋紹運じょううん以下五〇〇人余が玉砕して、宝満岳城の高橋統増むねますは降伏し、秋月種実むねねに預けられた。

七月二十五日、高橋紹運や立花城を救援するため京都を出発した黒田孝高・宮木入道宗賦は一〇日余で小倉に上陸し、毛利勢の来着を待ち、九月、高橋紹運の子統虎むねとらが籠城する立花山に入った。

この時すでに、島津軍は八月二十三日夜、立花城包囲を解き、筑前から撤退していた。

秀吉は豊前計略のため、四国より豊後へ渡っていた千石秀久へ、宇佐妙見岳城へ移動し、豊前東部四郡の制圧を命じた。

十月三日、千石秀久・長宗我部元親、大友義統らは宇佐郡に着陣し、一〇日後には東部四郡をほぼ制圧した。

宇佐郡の時枝鎮しげづか継はその一〇日以前に人質を毛利氏に差し出し、秀吉から当知行を安堵された。

同じく馬ヶ岳城の長野統重、山田・仲八屋・広津・宮成らも人質を差し出し、それぞれの城に毛利勢を入城させた。

府内・四国勢が宇佐郡へ出張している間に、豊後では、南郡の入田宗和そうわ・志賀道易ちがみちやすきらが島津氏に内通して、島津軍を引き入れた。

豊前西部では、立花城救援に向かった黒田孝高らは、島津軍

が退去したので、豊前西部四郡制圧に方向を転じ、十月四日、まず小倉城を包囲した。

小倉の城代は助命を請うたため、これを赦し入城した。この時、香春岳城の高橋元種も毛利方へ詫び言を申し越したというが、なぜか開城に至っていない。開城の条件を秀吉が容れなかったのであろうか（吉川文書）。

この時点で島津側として行動していたのは、高橋元種・城井鎮房・彦山座主舜有・仲間統胤・野仲鎮兼ら筑前の秋月種実の勢力圏に接した国人たちであった。

宇留津 長野統重は九月二十五日以前から毛利氏へ頼りに馬ヶ岳を抵抗することなく明け渡した。

城の合戦 に助命を懇望していたくらいだから、黒田孝高 椎田の海岸砂丘上に築かれた宇留津城には賀来与次郎・同孫兵衛久盛らが父専慶を香春岳に人質に取られているからと、抵抗し、城内にいた二〇〇〇人ほどが圧倒的な軍勢に攻められて全滅した。小早川秀包ひでかねも家来多数を戦死させ、感状を得ている（萩藩閩閩録、第四）。

この報告を受けた秀吉は「宇留津城、去る七日（十一月）責め崩し、千余の首を刎ねられ、その外男女（三七三人）残らず、はた物（礫）二相かけられ候儀、心地よき次第に候」（吉川文書）という感状を与えている。

二 障子ヶ岳攻撃

宇留津落城から一週間後、障子ヶ岳城が占領された。数万の大軍が遮二無二攻め立てたから城兵も持ちこたえられず、香春岳城に合流しようと夜陰に乗じて山を下りた。毛利勢はこれを追って幾ばくかを討ち取った。

障子ヶ岳城は香春岳城の端城の一つとして連絡・偵察の役目を担い、あまり守備兵を多く配置していなかったようである。

一所の者共、数手負い候通り承知し候、よくよく付くべく候、然らば、某もと無人たる候条、財

満右京亮父子遣わし候、申し談ずべく候、

障子岳取り詰めるの由に候、様体相聞こえず候条、具二申し越すべく候、

（下略、萩藩閩閩録、卷一七）
これは、十一月十五日付の毛利輝元の書状である。

障子ヶ岳攻撃の最終段階にあることを見玉元兼が報じたものである。

去る月十五日、障子岳取り詰めら



写真 5—1 香春岳城址